

東京言語研究所 日曜日午前講義 教師のためのことばセミナー

東京言語研究所では過去9回にわたり、「ことばへの気づき」を基盤として、「教師のためのことばワークショップ」を開催してきました。この考えが現行の学習指導要領にも取り込まれたことを受け、今回は「教師のためのことばセミナー」として、「ことばへの気づき」に関する講義と討論を実施することになりました。なお、新型コロナ状況を考慮し、開催形態はZoomを利用したオンライン形式を採ることにいたします。

受講者としては、小中高の先生、教員志望者、大学生、大学院生、大学教員、社会人など、いろいろなタイプの方々を想定しています。「教師のための」と銘打っていますが、教育関係者でないかたの受講も大歓迎いたします。なお、言語学・認知科学などに関する専門的知識は前提としません。

開催日： 10月17日, 31日 / 11月14日, 28日 / 12月19日

時間： 各日 AM10:00~12:00

講義形態： ZOOMによるオンライン講義

受講料： 12,500円(消費税込)全5回 ※1日単位の申込受付は行っておりません。

■ 日程・講義テーマ・担当講師

10月17日(日曜日)

ことばへの気づきと言語教育
(大津由紀雄・関西大学)

@Naomi Muto



10月31日(日曜日)

ことばへの気づきの対象(磯部美和・山梨大学)

11月14日(日曜日)

ことばへの気づきの発達
(五十嵐美加・東洋英和女学院大学)



11月28日(日曜日)

ことばへの気づきを利用した授業案
(向後朋美・十文字学園女子大学)



12月19日(日曜日)

言語への目覚め活動と複言語教育
(大山万容・立命館大学)



※ いずれも午前10時から正午までの120分
講義90分、ディスカッション30分の時間配分予定

■ 申込方法：HPの「受講申込書フォーム」にて申込

■ 申込受付期間：9月1日(水)~10月8日(金)AM10時まで

お問合せ：公益財団法人 ラボ国際交流センター 東京言語研究所

〒169-0072 新宿区大久保 1-3-21 / TEL: 03-6233-0631 / FAX: 03-6233-0633

E-mail: info@tokyo-gengo.gr.jp

講義要旨

10月17日（日曜日）第1講 ことばへの気づきと言語教育（大津由紀雄・関西大学）

第1講では、今回の企画趣旨について説明した後、「ことばへの気づき (metalinguistic awareness)」とはなにかということについて事例をできるだけ多く挙げながら説明します。たとえば、

- (1) 2人の俳優の婚約者が記者会見しました
- (2) 俳優の婚約者が2人記者会見しました

(1) を見て多くの方は仲がよい2人の俳優が同時に婚約会見をした状況を思い浮かべるかもしれません。
(2) を見たとたん、けしからん俳優だと憤りを覚えるかもしれません。似たような文なのに、どうしてこんなことになるのかと思い始めたら、もう「ことばへの気づき」の世界の入口に立っています。「いやいや、(1) はほかにもいろいろな状況が考えられる」とお思いであれば、あなたはすでに「ことばへの気づき」の世界にいます。

「ことばへの気づき」について概観したあと、言語教育にとってことばへの気づきがどのような意味を持つのかを解説します。その過程で言語教育の目的（「なぜ言語教育を行うのか」という問いに対する答え）についてもお話しします。最後に、第2講から第5講までの内容について予告をします。

なお、ここで「言語教育」と呼んでいるものは、母語教育（日本の学校教育で「国語（科）教育」と呼ばれているもの）と外国語教育の両者が有機的に連携された、ことばに関する教育を指します。この辺りについても第1講で説明します。

大津由紀雄

慶應義塾大学名誉教授、関西大学客員教授。文部科学省「言語力育成協力者会議」、「英語教育の在り方に関する有識者会議」のメンバー。言語教育関係の著書に『ことばの力を育む』（慶應義塾大学出版会、2008年、窪菌晴夫との共著）、『日本語からはじめる小学校英語---ことばの力を育むためのマニュアル』（開拓社、2019年、浦谷淳子・齋藤菊枝との共編著）など。

10月31日（日曜日）第2講 「ことばへの気づきの対象」（磯部美和・山梨大学）

第2講では、ことばへの気づきの対象である、音・単語・句・文の性質や意味、単語や文の使われ方、ことばの機能などについて、具体例を多く取り上げながら検討します。とくに (1)-(3) のような問いに着目し、それぞれの問いに関連する言語現象がどのように分析されているかを紹介します。その際、日本語と、英語などの外国語との共通点や相違点にも触れていきます。

- (1) 「ヤサハ」と「ゲビキ」、強くて大きなキャラクターにはどちらの名前がふさわしいでしょうか。
- (2) ビールの缶の形をしたグラスのことを日本語では「ビール缶グラス」と表現できますが、英語などの外国語でも同じように表現できるのでしょうか。
- (3) 「子どもが泣いちゃったのをどうやって笑わせたの」という疑問文は、誰が誰を笑わせたと尋ねているのでしょうか。

また、就学前の幼児が(1)-(3)に関連する知識をすでに身につけていることを示す研究も紹介します。

磯部美和

山梨大学大学院総合研究部教育学域教授。専門は言語獲得、言語心理学。慶應義塾大学大学院社会学研究科後期博士課程単位取得退学。博士（教育学）。「言語獲得」（共著）（『言語の事典』朝倉書店、2005）、「ことばの理解のメカニズムをさぐる」（『はじめて学ぶ言語学』ミネルヴァ書房、2009）など。

11月14日（日曜日）ことばへの気づきの発達（五十嵐美加・東洋英和女学院大学）

第3講では、「ことばへの気づきは何歳頃から芽生え、そしてどのように育まれていくのか」ということについて説明します。たとえば、

「ねえ、『あさはん』って言う？『ゆうはん（夕飯）』っていうのに、なんで『あさはん』は言わないの？」

「『はなをかむ』ってなんで『かむ』って言うの？『かむ』って何だ？」

いずれも私の息子の発話なのですが、これらは何歳頃の気づきだと思いますか？

このような子どもたちの日常生活における発話やことば遊びなどの具体例を紹介しながら、どの発達段階でどのような気づきが観察されるのかについてお話します。その際、第2講「ことばへの気づきの対象」の復習も兼ねて、その例がことばのどのような側面を対象とした気づきなのかをみなさんと一緒に考えたいと思います。また、過去の研究や実験データから得られた体系的な知見も参照しながら、ことばへの気づきの発達過程について解説します。実験データについては幼児期の子どもものから大人のものまで幅広く扱う予定です。

また、今回は「教師のための」セミナーということですので、動機づけや学習方略といった教授・学習に関わる要因とことばへの気づきの発達との関係についても補足的に扱います。みなさんに「教育現場での実践」と「ことばへの気づきの発達」とのつながりについて具体的なイメージをもってもらえるようにすることが今回の講義の目標です。

五十嵐美加

東洋英和女学院大学教職・実習センター講師。専門は言語教育、教育心理学。中学・高校教員、日本学術振興会特別研究員、専業主婦を経て現職。これまでの主な業績・活動に『日本語からはじめる小学校英語---ことばの力を育むためのマニュアル』（開拓社、2019）の分担執筆、中高生のための言語学講座や認知心理学に基づいた学習法講座の企画・講師担当などがある。

11月28日（日曜日）

ことばへの気づきを利用した授業案-大学での授業実践例--（向後朋美・十文字学園女子大学）

現行の国語・外国語の学習指導要領では、ことばの普遍性やことばへの気づき、また、国語科と外国語科の連携の重要性について意識されている記述が盛り込まれていますが、具体的にどのような素材を用いてどのような方法で授業を行うかは各教員の技量に任されています。そこで、第4講では、第1講から第3講までの内容を踏まえたうえで、「ことばへの気づき」を利用してどのような授業を行うことが可能なのかを実践例をもとに考えます。

まず、小学校・中高英語の教員免許取得を希望する大学生向けに行っている「ことばへの気づきワークショップ」という授業の位置づけとねらいを説明します。次にその取り組みについて、うまくいかなかった点

も含めて、お伝えします。具体的には、『ことばの力を育む』（慶應義塾大学出版会、2008年、大津由紀雄・窪園晴夫著）や『日本語からはじめる小学校英語---ことばの力を育むためのマニュアル』（開拓社、2019年、大津由紀雄・浦谷淳子・齋藤菊枝編著）などで取り上げられているいくつかの題材をもとに作成した授業案、その授業案を沿って実際に行った授業の様子、学生の反応などを紹介します。最後に、ここでの実践をどのような形で小学校・中学校・高等学校での授業に落とし込むことができるかを考察したいと思います。

向後朋美

十文字学園女子大学教育人文学部児童教育学科教授。「ことばのしくみ」「英語学」「ことばへの気づきワークショップ」「英語科教育法」などの授業を担当。『要点明解 アルファ英文法 新装版』（研究社、2017年、宮川幸久・林龍次郎編、小松千明・林弘美との共著）

12月19日（日曜日）言語への目覚め活動と複言語教育（大山万容・立命館大学）

第5講では、これまでの講義を受けて、ことばへの気づきを高めるための具体的な教育的アプローチである「言語への目覚め活動」を紹介します。これはヨーロッパで「複言語教育（plurilingual education）」と呼ばれるものの一つで、複数の言語（変種）を同時に使う教育活動です。

例えば小学3年生の児童に、次のような文のいずれかが書かれた紙片を配ります。

- ◇ Եթէ խօսեմ մարդկանց լեզուները եւ հրեշտակներինը, բայց սէր չունենամ, կը նմանուեմ մի պղնձի, որ հնչում է, կամ ծնծղաների, որ դողանցում են
- ◇ У вас будут неудачи, и не один раз, и иногда все будет настолько плохо, что вам захочется опустить руки.
- ◇ Met vreemden praten kan intimiderend en vermoeiend zijn, zeker als er veel op het spel staat..
- ◇ وهناك على الكرسي المقابل لي تجلس فتاة، تضع يديها على خديها، مغمورة بخيالات تدور في عقلها الآن، وهي تنظر إلى النافذة

4種類の言語がありますが、子どもたちが受け取るのはそれぞれ違う文です。ここから活動です。「同じ言語の人を見つけてグループになりましょう」と指示します。次にグループごとに、「その言語が何語であるか」を予想してみます。決して分かるまいと思われるかもしれませんが、子どもたちは「何語に似ている」とか、「どこで見たことがある」と様々な手がかりを口にします。教師が答えを教えたら、最後に、これらの言語で書かれた絵本を並べ、「自分の言語で書かれた絵本を見つけましょう」と言います。

こうした活動を通して、子どもたちは何を学び、それはどのような力につながっていくのでしょうか。講義では小学校低学年、中学年、高学年の児童に適した教材をそれぞれ紹介しつつ、ことばの教育の中にどのように取り込めるか、についてお話しします。

大山万容

立命館大学ほか非常勤講師。主著に『言語への目覚め活動－複言語主義に基づく教授法』（2016年、くろしお出版）、『世界と日本の小学校の言語教育』（共著、2015年、明石書店）。訳書に『バイリンガルの世界へようこそ』（フランソワ・グロジャン著、西山教行らと共訳）など。